

教育研究會

五月二日午後六時半

於京大文學部會議室

「進歩的建設的教育について」

松尾一徳

従來の國家主義的畫一教育より脱して新しい方向をとりつゝある我が國の教育が具體的には如何なるものであるべきかについて、現在、立命館高校の校長として、同校に於て實際に計畫し、實施されつゝある教育について發表された。即ち、「これからの教育の目的は眞の人間を作るに在る。そして眞の人間とは、『豊かな個性をもち、その屬する社會に於て、なすべき仕事を積極的に遂行し、社會の進歩・發展に寄與する人間』に他ならない。しかるに事實は、舊態依然たる保守的教育の固執及び之と反對の、現實離れのした新教育の主張が横行してゐる。之等に對し我が國の現實に即し建設的な進歩を促進する人間を育成すると云ふ方向をとるべきである。」とし、斯る見地に立つ學校の在り方を、(1)學校環境の整理 (2)教育課程の編成 (3)教師の在り方の三つを中心として詳しく論じられた。發表後、「實施されてゐる方法」「進歩的の語の吟味」「共產黨細胞の取扱ひ」「先生への要求」等について討議を行ふ。

「ソ連邦の教育」

西元宗助

一九一七年の赤色革命後のソ連邦の教育方針とその實施の概観を、戦時中の研究と、昨冬の抑留生活での見聞とを交へて紹介された。即ち、革命後教育方針として掲げられた (1)教育の人民大衆への開放；(2)國民教育義務制の實施、(3)婦人の開放；(4)男女共學、(5)民族開放；(6)教育上の民族無差別、(7)政治教育；(8)教育と宗教の分離と共產主義教育、(9)社會主義社會の建設；(10)生産技術教育の普及、(11)自由の要求；(12)自由主義教育思潮の採用とその後のカリキュラムの變遷、の各項目について具體的な紹介があり、後會員中の抑留經驗者の見聞の發表もなされ、ソ連邦に於ける教育の實狀について質疑が交された(終了九時半)。

六月十日午後六時半

於京大文學部會議室

「マリタンのプラグマティズム批判」

池田進

ジャック・マリタンの Education at the cross-road に據りて、彼のプラグマティズム教育説に對する批判について發表された。即ち、「道義論者プラグマティストの哲學より開放されるならばアメリカは三百年以前の逞しさをとり戻すであらう。インストルメンタリズムはインスピレーションをそぐものである」と警告するマリタンの所説を、プラグマティズム教育説のもつ「誤り」mis-conclusion として指摘する所、教育方法・發達段階の分け方、及び將來の教育に對する見解、に亘つて詳しく紹介。「彼の批判にもいくつかの問題があり、之に對する

反駁も行はれてゐるが、その「誤り」として指摘する所、即ち教育に對して、人間の内面的・精神的なヴァイタリティーの開發に重點を置き、實際的技能的訓練よりも一般的人間能力の開發に優位をおくべしとする見解には聞かすべき點があると考へる。然し實際的な教育方法に對する考へ、發達段階の分け方等は、進歩主義者の所説と大した相違はないやうに思ふ。」と結論された。發表後、「エツセンシヤリストの考へ、その中でも區別されるべき Perennialist (永久主義者) の見解、及び之に對する進歩主義者の側よりの批判等について討論を行ふ。

「部落問題について」 南 弘

教育の現場に常に存在し、然もはかどしい解決を見ない困難な問題として、部落問題についてその實狀を紹介された。即ちその發生の原因、歴史的な變遷、現在特に戦後に於ける實態、更に之に對する一般市民の知識・態度の實態調査の結果について論じ、部落問題の由つて來る所、及びその解決の困難は、専ら一般人の側の無知に歸すべきものであることを、種々の實例をあげて強調され、同和教育と稱されるものは、地區を對象として行はるべきものではなく、一般社會人に向けられるべきものであること、そして地區を對象とする場合は、その考案感の排除に重點がおかれてゐることを示され、この問題に對する正しい理解を要望された。發表後、實際に起つた問題、會員の持つ經驗等を中心に討論を行ふ(終了九時半)。(蜂屋)

關西倫理學會發會式豫告

- 一、發會式(第一回總會) 十月八日(日) 午前九時半 京大文學部 第七講義室
- 一、公開講演會 同日 午後一時半 京大文學部 第一講義室
- 「カントの倫理説と其の應用」 奈良女大 教授 伊藤 惠君
- 「道德的事實と社會的事實」 京大 教授 島 芳 夫君
- 一、懇親會 右終了後會員有志の懇親會を催します

京都市五局 区内 吉田
京大文學部倫理學研究室内 關西倫理學會

執筆者紹介

武内 義範	京大文學部(宗教學) 助教
山本 浩幸	九州大學教養部(哲學) 助教
安藤 孝行	金澤大學法文學部(哲學) 助教
白井 二尙	京大文學部(社會學) 教授
長尾 雅人	京大文學部(佛教學) 助教

岡野留次郎氏「アリストテレス存在論の基礎構造について」の正誤表(但し特に重要なものについて)

頁	行	誤	訂 正
三百八十三	一六	並に範疇解釋の原理	並に範疇演繹の原理
三百八十五	五	け、られ	け、また働きかけられ
三百八十七	五	「包まれたものに對し」「それに	「包まれたものに對し、それに
同	一一	限りの感性的存在	取扱ふ限りの感性的存在
同	九	取扱ふ作品	作品
三百九十三	四三	時間の非連続	時間の非連続的連続

前 號 目 次

宗教的實存の實存的課題(卷)………	石津 照塵
—キェルケゴール諸著作の位置と意義—	
思辨論理の可能性に………	山本 清幸
就いて(承前)	
鎌倉期淨土教の時間論的展開………	河野 憲善
—一過の當體の念佛について—	
書評—Northon, <i>The Meeting of East and West</i> と Althaus, <i>Die christliche Wahrheit</i> (卷) (51)	(有賀 謙太郎)

寄贈雜誌論文目次 (受領順)

史學雜誌 (東京大學文學部・史學會) 第五十九輯第六號 (昭和二十五年六月)

越後山間地帯における純粋封建制の構造

サルスステイウス小論 北島正元 吉村忠典

一橋論叢 (東京商科大学一橋學會) 第二十四卷第一號(七月)

國際通貨制度における金の問題 宮田喜代藏

「ボンド切下およびドル切下をめぐりて」 リカパドボの國際均衡論 小島清

經濟論叢 (京都大學經濟學會) 第六十五卷第六號(六月)

再生産理論に關する一考察 松井清

FOHOKU PSYCHOLOGICA FOLIA (東北大學) XII-1, 2 (三月)

Absoluteness of an Absolute Judgement

On a contrast effect brought about by a series of different kinds of preceding stimuli upon an absolute judgement of a lifted weight

Y. Ohwaki

Die elektrische latographische Untersuchung der psychischen Zustände bei den physikalisch-akustischen Zeichen

K. Takahashi

A psychological Research on the healthy to distribute Consciousness. S. Nami

哲學雜誌 (東京大學・哲學會) 第六十五卷第七〇六號(五月) 文藝學の哲學的方法 竹内敏雄

工藝美術論 谷田 関次

シラーの文藝様式論 針生 一郎

「ナイフ」な文藝とセンチメンタリズム 久文彦

マスバース教授の消息 鈴木 三郎

主 観 考 細谷 貞雄

認識論における自然的態度の恢復 廣 代 謙

ウイーン學團の成立 花田 圭介

史學雜誌 (東京大學文學部・史學會) 第五十九輯第七號(七月)

日本中世福林に於ける經濟・曹洞兩宗の異同(上) 玉村 竹二

「林下」の問題について 守屋 美都雄

社 の 研 究

法文論叢 (熊本大學法文學會) 第一號(六月)

フッセルの科學論とイデア性 佐竹 哲雄

フランシスコ・スアレスと國際法 伊藤 不二男

「國際法文獻史」の研究 一

ペーオウルフとアングロ・サクソン年代記 河原 畑正行

「ペーオウルフ序詩の翻譯に就いて」 寺本 直彦

倭寇における譯民物産の受容 永松 謙一

「危機と克服」 松本 聖明

詩經接受詩における狂若の表現 一その新古の層別に関する一考察

中世都市に關する一研究 松平 齊光

「ルアン」の市政に就いて 小場 酒草三

「祖國」の觀念 寺澤 恒信

「ヘーゲルの市民社會體系」序論 山田 幸三郎

「アラウストの救(上)」 一キリスト者の體裁的解釋 一

ブラトン及びアラウストの奴隷論 山本 光雄

讀書春秋 (國立國會圖書館・春秋會) 第一卷第三號(六月) 第四號(七月)

一橋論叢 (東京商科大学一橋學會) 第二十四卷第二號(八月)

損害防止條項、特に See and Labour Clause の史的考察 加藤 由作

「ザラントリイ・チエーン」における基本問題 深見 義一

資金使途監査のための復讐定期繰 岩 田 巖

管理通貨と資金計畫 山 口 茂

「貨幣分析と貨幣經濟理論」の構造 高橋 泰藏

史學雜誌 (東京大學文學部・史學會) 第五十九輯第八號(八月)

古ゲルマン農政をめぐる諸問題 堀 米 庸三

日本中世福林における經濟・曹洞兩宗の異同(下) 玉村 竹二

「林下」の問題について 一

ソ連邦における中央アジアの最近の考古學的研究 香 山 昌 坪